

伏となったのでした。

午後の零時ころだったと思う。各隊から命令受領者集合の伝達があり、何事だろうと、自分も部隊本部に駆けつけていたら、何と敗戦の知らせである。ただ啞然とするばかりであった。まさかと思つたのが現実となつてしまつたのだ。隊へ帰つてこのことを報告した時は、誰一人として声もなく、しばらくの間茫然としていたが、次にすすり泣く声があちらこちらに出てきて、ある者は、ぼろぼろと涙を流して泣き狂う姿さえ見えて来た状態であつた。我々はこの後どうなるんだらう、みんなそんな不安にかられていた。

翌々日、部隊は踏安附城村に集結し、ここで一切の武器を中国正規軍の前に出し、武装解除となつたのである。私は実際の軍隊生活は十カ月、そして抑留生活十カ月、昭和二十一年六月、鉄路で上海まで、そして佐世保に上陸、復員となつたのである。

故国日本の姿は、変わらないのは山河だけで、都会という都会は瓦礫の山と化し、出征当時の面影はどこ

にも残つていなかった。戦争というものは大自然も破壊し、幾多の人命をも犠牲にするのである。自分はあの戦いで、足下の銃創ぐらゐで再び故郷の土を踏むことができたが、帰ることのでき得なかつた戦友のことを想うと、戦争という事態は永久に、我々の子孫には味わわせたくはないものと、祈るのである。

## 北支、河南作戦を生き抜き

### 今の平和に感謝

山形県 上田 徳二郎

歓呼の声の熱気に囲まれ、無我夢中の中、村長さんや、その他有力者の激励、祝辞に応え「皇国の為に身を捧げて来ます」と覚悟の程を披瀝し、後顧の憂いもなく住み慣れた故郷に別れを告げた、あの日、あの時の感激が今でも脳裏に焼き付いています。

私は父母、兄、姉三人の末弟として生を受けたためか、父と兄が農業の傍ら炭焼きを生業としていたの

で、生計は決して楽ではなかったと思われれます。父は日露戦役に出征し、貧しさや生活の厳しさを知らずに、九死に一生を得て帰還したと言われています。その厳格な父の躰のなかで、末っ子の甘えも許されずに成長したのです。

私は大東亜戦争の熾烈極まる昭和十八（一九四三）年十二月一日、現役兵として壮丁三十人と共に、山形北部第十八部隊第三砲兵隊に入隊、二等兵の肩章がずっしりと重く感じられ、右も左も分からずじまいの一週間後、北支派遣の命令が下り慌ただしく原隊を出発しました。

列車にて博多港着、直ちに乗船、海上も無事に、夕刻には釜山港に到着しました。上陸後列車にて鮮満国境を経由し、安東、更に満支国境山海関を通過し、山東省浜県に駐屯の北支派遣軍北支那方面軍第二九七六部隊（第一一五師団第八六旅団所屬）独立歩兵第三十六大隊要員として任地に到着しました。

直ちに初年兵教育の厳しい教練が開始されたので

す。寒冷の地であるから手足がかじかむような中で「寒ければ体が温まるまで走り、動け」の叱咤激励に鍛えられ、一期検閲をどうにか終了することができました。

昭和十九年五月一日、一等兵に進級し、その直後、河南省の部隊転属の命を受けました。五月二十日、野戦独立機関砲第八十三中隊（第十二軍、仁第一五六五三部隊）に編入となり、五味少尉（小隊長）の当番兵を命ぜられ一生懸命に任務を全うしました。

その後、軽機関銃隊、重機関銃隊を経て機関砲隊に編入され、河南作戦参加兵の警備交代要員となり、青島、濟南、開封、鄭州、許昌方面の攻略線に参加しました。進撃に次ぐ進撃の厳しい戦闘を強いられ、明日の命は無いものと覚悟しての毎日でした。

昭和二十年一月十日、幸運にも上等兵に任せられ、いよいよ使命の重さが身に感じさせられました。間もなく重要な任務である黄河鉄道の鉄橋警備の任務に着きました。二五ミリ、一三ミリの機関砲六個分隊に分

かれ、鉄橋の上に分散配備に着いたのです。

連日にわたり米軍機コンソリテッドB24爆撃機の空襲が間断なく繰り返されました。また夜間には低空で機銃掃射を受けましたが、これに怯まず「勇敢なる古年兵に負けてなるものか」と命がけて応戦した甲斐があり、味方の機関砲弾が敵機パイロットの頭部を貫通、機体諸とも山中に墜落させました。パイロットと思われる女性兵士も含め乗員十一人が全員死亡しました。

本当に戦争とは一面識もない人と人との殺し合いなのだと思ふと、気の毒に耐えないという思いもありました。しかしながら運が悪ければ、逆に自分達があの爆撃で吹き飛んでしまったのではと思うと、戦場にあっても世の無情を嘆かずにはおられませんでした。

それから敵機の飛来があっても、高い空から爆弾ではなく無数のビラとおぼしき物を撒き散らして、去って行ったので「これは変だ」と思っていたら、空襲もなく穏やかな日が続き、三日程したら「日本は全面降

伏し、終戦になった」旨を上司より知らされました。

その時は「何がどうなったのか」と口惜しく皆で泣き合い、これからどうなるのやら大変だと悩み苦しみの明け暮れでした。

私の部隊はその後、黄岩村という部落の捕虜収容所に入り、中国の将校の監視の下に城壁の警備とは名ばかりの労役で、食うものは心配なく、帰る日までの健康保持のために自分の好みに合った相撲大会、演芸会、運動会と多彩な行事に、童心に帰り、今までの軍隊生活の苦勞が消し飛ぶ毎日で、安穩な生活でありました。しかし故郷を思わぬ日とて無かったです。

そんな日を送る合間に支給になった米、乾パン、缶詰、その他数種類に及ぶ生活用品合わせて八貫目位の物品を入れるリュックサック作成のため、覚束無い手付きで皆で励まし合って作業をしました。どうにか仕上がった頃待ち望んでいた祖国への復員命令が下りたのです。

それは昭和二十一年四月に決まり、足どりも軽く、

收容所に別れを告げ、同地より無蓋車にて徐州、北京、蘇州を経由し、中国軍一個中隊の護衛のもと上海に到着。ここから米軍の上陸用舟艇に乗船し、一路博多に向け出港、無事博多に上陸しました。各種検疫と消毒のDDTを頭から散布され、また所持品の嚴重な検査も難なく合格したのでした。

四月十九日祖国の地を一步踏んだ瞬間、胸にじんとき来ました。この思いを味わえないで異国の地に果てた亡き戦友よ、靖国の御柱たらんと祈ると共に、祖国復興に向け頑張る事を誓ったのでした。

復員と同時に兵長に任命され、それぞれの思いを乗せた復員列車が発車したのでした。

すっかり列車の人になり、そろそろ昼食にしようと飯盒炊飯して来たご飯を食べ始めたら、向かいの座席にいたおばあさんに連れられていた幼児が、私のご飯を食いたいと泣き出しました。「悪い事をした、ごめんね」と謝り、分けてやると、旨いと大喜びでした。

内地に来た喜びも、この事実逢いに、銃後の護りも大変だったと肌で認識させられました。覚悟してのお

国入りでしたが、想像以上で、砂糖どころか塩も着る物などすべてがないづくしの故郷でありましたが、幸い農村は食べる物だけは何とか事欠く事もなく、安心して農業ができることが取り柄でした。

縁があつて土田家に養子に迎えられ、農業の傍ら出稼ぎをしたり、いろいろ苦勞もありましたが、軍隊生活の中で培った不屈の精神力と妻ユキ子とお互いに支え合つて、厳しい人生を乗り越えることができました。

長男も嫁・佳子と結ばれ、孫二人もすくすくと成長して、じいちゃん、ばあちゃんと呼ばれて家庭円満な現在の幸福に辿り着くには、それなりの苦勞も厭わず乗り切つて来たからです。かつてのけわしい顔も、鋭い目つきも今は柔和な笑顔で毎日をごしております。

平和な世の中に心から感謝している現在です。戦後も半世紀を過ぎました。この平和な日本、否、世界が子々孫々までも繋げたい思いは、全国民の願望である

と思ひます。禍は忘れた頃にやつて来ると言われま  
す。再びの戦禍は本當に懲り懲りです。明日をも知れ  
ぬ日々の中で、互いに勵まし合い支え合つて来た戦友  
は生涯の友、同郷の迎田仁太郎氏も、その中の一人で  
す。

### 【解 説】

—第十二軍関係、河南作戦関係—

聞き取り対象者（土田徳二郎）の北支での勤務部  
隊、独立歩兵第三十六大隊は、昭和十九年七月、独立  
混成旅団より編成替えとなり、第十一師団（北第二九  
七一部隊）の隷下となり、北支那方面軍第十二軍の直  
轄部隊となつて、京漢沿線警備・老河口作戦に参加し  
たのである。

昭和十九年五月二十二日転属した野戦独立機関砲第  
八十三中隊は、第十二軍直轄であり、同隊の他に、同  
第十二軍の直轄部隊には左の部隊がある。

野戦重砲兵第六連隊 独立山砲第一大隊  
独立速射砲第四十三中隊 電信第十連隊

自動車第二十五 同第二十六連隊 第二十四

第二十五 第三十一架橋材料中隊

第七師団第四陸上輸卒隊 第一六八 第一六九

第一八六 第一八九兵站病院 新郷陸軍病院

歩兵第二四〇連隊（第一〇八師団—裕兵団第二六

五六部隊—錦県 熱河省承徳）。

—河南作戦—

この作戦は、華北全域に分散した態勢で、長年にわ  
たり治安の維持に専念してきた北支那方面軍が、その  
兵力の約半数を集結し、決然と河南省に進攻した一大  
作戦である。

進攻部隊は、臨時集成の野戦軍である第十二軍（仁  
部隊）であり、交戦した重慶軍（蒋介石軍）第四三二  
師団の約六〇パーセントに壊滅的な打撃を与え、河南  
省における政、戦略の要衝洛陽を攻略して、その要地  
を占領した。

また、これに策応した第一軍は、河南の防衛に増援  
してきた第八戦区軍を撃破した。そして、一号作戦の

主目的である湘桂作戦遂行のため、その一環である京漢地区に対する陸路後方連絡線を確保することができたのである。

この間、撃滅作戦の主体は、第一戦区の主体は、第一戦区特に湯恩伯軍に対する作戦の指導であった。なお軍は当初まず黄河北岸所在の作戦軍主力を河南岸に集結するを要したが、当時これも中国軍の積極攻勢を予測して、黄河河畔の開戦として指導された。また洛陽の攻略戦及び東進する敵第八戦区軍に対する我が第一軍の霊宝会戦も指導された。

土田氏も文中、河南作戦参加兵の警備交代要員となり、青島、濟南、開封、鄭州、許昌（京漢沿線の主要地域）方面の攻略戦に参加……云々と発言している。

## 中国戦線に

### 現在の林業を思う

愛媛県 神田宗玄

私は、四国高知の新居浜で、大正十三（一九二四）年七月十日、農業、林業を家業とする家の長男として生まれました。兄弟は八人、男四人・女四人という大家族ですが、父は健在で、事業と共に、村議会などで活躍していました。現在では、八人の兄弟・姉妹というと、驚く人もありますが、当時、農村地帯では、五人以上が普通という時代でありました。

私は、家業のうち林業に、他は後に教職員等になっていきました。昭和十八年春、徴兵検査では、体は良いが近眼のため第一乙種となり、甲種合格というわけにはいかなかったのですが、当時は、第一乙種は甲種と共に現役兵となったのでした。

父は、私が長男であると共に、当然、兵隊に行くだ